卒業遠足の今日

日頃寝　ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
卒業遠足の今日

【Ｎコード】
Ｎ２３０４Ｏ

【作者名】
日頃寝　ハル

【あらすじ】
私は大野鈴子。
高校三年生。
先々月親友のアミちゃんに彼氏ができた。
卒業遠足の班は複雑なことになってしまった。
友情とか恋とか、人気者のネズミとか。
進路とか夢のか、しゃがれ声のアヒルとか。
全部大事で、壊したくないのに。

うまくいかないなぁ。そんな話。

夢の国の入り口

まだ進路が決まってない私としては、手放しで楽しめない卒業遠足。
でも、本当はとっても楽しみ。
だって、某ランドへ行くんだよ！！
ネズミの彼にも会えるかもだよ！！
嗚呼早く行きたいなァ…

そんな私の思いは班決めのときに、半減してしまった。
一番の仲良しだったアミちゃんに彼氏ができて、何故か彼とアミちゃんと私でまわることになってしまったのだ。

完璧にお邪魔じゃん！！

アミちゃんの彼氏の木村君は話やすいとってもいい人。
嫌じゃない。嫌じゃないけど…
アミちゃんも二人きりより、会話ができていいっていうけど…

「どこまわる～??」
「まずは僕がファストパスを取ってくるから、アミはスペースマウンテンに並んでて。」
「分かった、ありがと～！！」
なんて言いながらパンフ見ながら顔を寄せ合っている二人を見ていると、やっぱりお邪魔でしょって私は小さくタメ息を吐いた。
私は当日は盛大なタメ息をつくことになる。

入り口で先生の点呼を取った後、三人で入ろうとしたら、私は担任に呼び止められた。

「おい、大野。化粧してるだろ」
「えっ！！」
とばっちりを受けないよう、アミちゃんは
「頑張って」
と小声で言って、木村君と園内に入って行った。
「うそ。え、待ってぇ！」
私の叫びは二人で並ぶ幸せそうな背中には届かなかった。

私の化粧は濃くない。むしろみんなより全然薄い。
アイライン引いて、睫毛上げて、グロス塗って、終わり。
いつも学校でしてないから、目だっただけ。
それなのに、教師歴三年の若い担任は変な指導情熱で私をとっ捕まえやがった。

「本来なら、入り口で解散時間まで、先生と待機となるところだが…」
一呼吸入れてためるところが、ウザイ。こっち見んな。
私は担任を思いっきり睨んだけど、全然効果なかった。
「先生も遠足、楽しみにしてたからな。
化粧落としたら、班の子と行って良いぞ。」
センセー。友人は私をおいて逃げましたー。
担任はキョロキョロ辺りを見回して、
「あれ、大野、まさか一人でまわるのか？」
と一人であせっている。
誰の所為だ。誰の！！

「大丈夫です。スイマセンでした！」

私はそう言って先生を残し、入り口脇のトイレに入った。
私は化粧を落として、（と言ってもクレンジングオイルないから、顔洗っただけ）盛大なタメ息を吐いた。
空は絶好の遠足日和。秋晴れの高い空。聞こえるリズミカルなＢＧＭ。
私はまだ何一つ乗ってないどころか、入ってもない状況で一人ぼっちになってしまった。
「最悪…もぅヤダ…」
涙が出そうになった。
行ってしまったアミちゃんも、担任も最悪。
アミちゃんに、夏休みの私が知らない間に告白した木村君も最悪。
いい人そうじゃんなんて、メールで軽く流しちゃった私も最悪。
ラブラブな二人を見て、うらやましいどころか、イラついた私が最悪。
班決めの時、空気読まずに「アミちゃん一緒にまわろう」なんて言って、アミちゃん困らせた私が最悪。
「三人でまわろう」って言ってくれた木村君に、当然の顔した私が…

夢の国なんて一人で入れないよ。

「大野、一緒にまわるか。」
一人ぼっちだと思っていた夢の国の入り口で、担任が立っていた。

夢の国の入り口（後書き）

読んでくれてありがとうございます。
少しずつ、進めていきたいと思います。
よろしくお願いします。

夢の中

どうしてこうなるのか。
私は考えた。
少し前を歩く、担任の横顔を見ながら。

「一緒にまわるか。」
そういって、担任は私の手をとって、ゲートをくぐった。
くぐってすぐに手を離したけど。

なんか、おっきかったな、手。

いやいやいや。一人の私を気遣って、誘ってくれたんだ。
かわいそうな子と思われたかもしれない。

「さて、どこに行きたい？」

そう聞いてくれた担任に私はちょっとだけ、期待してしまうのだった。

「大野は薬剤師になるんだよな。」
ポップコーンの列に並んでいるとき、担任が言った。
「なれるか、分かんないんですけど…」
ここのポップコーンはどの映画館のよりも美味しい。
と担任が言ったので、長だの列に並んで半分のときだった。
「お前なぁ…、なりたいと俺に言ったんだから、自信持てよ。
お前がなるって思わないで、どうすんだよ？」
「なりたいけど、大学うかるか、不安です」

甘い匂いが近づいてくる。
一歩一歩。
「センセー、夢の国で進路の話はナシですよ。」
私は言った。

たぶん、この感覚と似ている。
どんどん近づいてくるんだ。
色んなことが。
不安とかホントはそんなモンじゃない。
砂時計の一粒一粒が惜しい。

ほらね！進路のハナシなんかしたから、夢から覚めちゃったじゃんか。

「ごめんごめん。
でもな、そんないっぱいいっぱいにならなくても、大学がゴールじゃないんだから。
落ちても、次がある。
本当になりたいものは、いつからでもなれるんだぞ。」

パレードがもうすぐ始まると放送が告げた。
また私は夢の国へ引きずり込まれる。

「あれ？大野さんと高田先生でまわってるんですか？」
ジェットコースターに並ぼうとしていたとき、国語の安部先生に声を掛けられた。

阿部先生は、一人で食べ歩きのチキンを食べていた。
「そうなんですよ。大野が化粧してきたから、注意してる間に友達とはぐれちゃったみたいで…」
「そうなんですか～。大野さんいつもはしてないのに、気合いれちゃった？」
阿部先生がにこやかに私の顔を覗く。
「まぁ…はい。そうですね」
なんか、上から目線！！
「安部先生はお一人で？」
担任が訊く。
阿部先生は恥ずかしそうに
「ええ。さっきまで派手なカッコのうちの生徒を補導して一緒に歩いてたんですけど、逃げられちゃっ　て…」
と言った。
阿部先生は、一昨年学校に赴任してきた若い先生だ。
いつもの授業の怒鳴り声とはまったく違う、小さな声。
「じゃあ、一緒にまわりましょう。」
と担任は言った。
「そうね、歩いてる間に、大野さんの友達にも会えるかもしれないですしね！」
阿部先生はにっこりと担任に微笑んだ。
そして私に
「大野さんも、早く友達にあえるといいね。」
と言った。

この人、あまりに分かりやすく、且つ図々しくないですか？！

私は二人の後ろを歩きながら思った。
私が担任と歩いてたのに。

私が担任の横にいたのに。

ってあれ？

なんでこんなに怒っているんだろう？

よくよく考えたら、阿部先生の態度は当然だよね。

生徒と教師で歩いていて何か楽しいことあるか？？

「やっぱり私、絶叫系無理なので、パレード見に行きます！」

私は列に並ばず、走りだした。

「えっ！おいっ待て！！」

制止した担任の声に背を向けて。

夢の中（後書き）

読んでくださって、ありがとうございます。

楽しんで読んでいただければ、と思います。

夢の中　友達編

走って、走って。

本当はこの場所から逃げたかった。

進路とか友達とか担任とか…自分とかから。

本当に自分が嫌い。

色んな言い訳して、人に責任転嫁して。

自分が一番わがままで。

楽しみにしてた。

去年、アミちゃんとあーちゃんとシノちゃんで遊んだときは、本当にここは夢の国だった。

夢の国の中で、笑って、笑って、スキップして、

中身がない会話してたかもしれないけど、みんなといれるだけで私達は本物だった。

ずーっと、ずっと、みんなで一緒にいれるんだと思ってた。

あーちゃんとシノちゃんとクラスが分かれて、あんまり遊ばなくなって、受験とかあるし、全然遊ばなくなって、

「しょうがないよ。勉強忙しいじゃん。お互い。」

なんてアミちゃんに言われて。

「ほら、今年の卒業遠足は一緒にまわろう！！」

ってアミちゃんに言われて。

結局それもなくなってしまった。
私がアミちゃんが真剣に鈴木くんのことで悩んでいるとき、一緒に悩んであげなかったから。

私が今一人なのは、誰かを一人にしてしまったからだ。
きっとそうだ。

人気もののネズミが、夢の国の住人に囲まれている。
私はそれをボケッと見ていた。
通り過ぎる人はみんな笑顔。
人気者のネズミが手を振った。
もちろん私にではなく、幸せそうな夢の国の住人へ。
と思ったら、その住人はアミちゃんと鈴木君だった。
「え。なんで?!一人なの??」

アミちゃんは私を見つけると、鈴木君と繋いでいた手を離して、走ってきてくれた。
ネズミからどんどん離れて、アミちゃんの顔は何でか泣きそうだ。
アミちゃんは私の手をとると言った。
「あーちゃんとシノっちに、メールしたのに。」
「メール……」
私は携帯を出して、メールの問い合わせボタンを押した。
「きてた。」
どこいるのー??一緒にまわろうよー!!とシノちゃんからメールが来てた。
あーちゃんからも。
「なんで?
だってあーちゃんもシノちゃんも、クラスの子とまわってるんじゃないの?」
私はアミちゃんにきいた。
「そうだけど、シノっちもあーちゃんもいいって言ってんだからいいんじゃん。」
「でも…」
私はあんまり、シノちゃんの友達ともあーちゃんの友達とも仲良くない。
と言うより話す機会がなかった。
「…てか、アタシが悪いんだよね。ごめんね。おいてっちゃって。」
ごめん〜。そう言ってアミちゃんは手を合わせた。
本気で謝ってるアミちゃん。
私は私がやっぱり間違ってたんだ。と思った。

「そうだよ。さびしかったんだから!!
…でも、こっちこそごめん。アミちゃんと鈴木君をジャマするようなことしちゃって。」

早く言えば良かったんだ。
私の気持ちを、アミちゃんに。みんなに。
そうしたら、シノちゃんもあーちゃんも今ここにいて、前みたいに仲良しだったかもしれない。
遠慮とかして、自分の気持ちを言わずにいると、相手に伝わらなくなっちゃう。

でも。
私はケータイをギュッと握った。

まだ繋がってるよね。

二人で繋いだ手をブンブン振った。
アミちゃんの後ろで見ていた鈴木君が
「仲直り出来てよかったね。」
と笑った。

夢の中　友達編（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

仲直りできてよかった！

友達って自然にできて、自然に消滅しちゃったりするんです。（私の場合）

でも本当に大切な友達は、ずっと一緒にいたいから。

腹を割って話したりすることが、大事なんじゃないかと思うのです。

夢の中　恋愛編？

アミちゃんと鈴木くんとパレードを見ていると、
「良かったなー大野。友達と会えて！」
と後ろから担任に声を掛けられた。
「あっ！高田センセー。」
アミちゃんが驚いて私と担任を交互に見ている。
「ってか、高田センセーと一緒にいたの？！」
「って、網本（あみもと）と鈴木は付き合ってたんだ！」
へー、うんうん。担任はアミちゃんと鈴木君の手が繋がれているのを発見し、一人で頷いてる。
私はアミちゃんに詰問され
「あーうん。」
と小さく頷いた。

担任と離れてあまり時間は経ってない。
担任は私の事を探してくれたんだろうか。

そこまで考えて私は阿部先生の姿がないことに気づいた。
「センセイ、阿部先生はどうしたんですか？」
「まだ並んでる。待っててもらってる。」
と担任は複雑そうな顔で、アミちゃんの顔を見ながら言った。
アミちゃんの化粧に気がついたけど、それを注意しようか迷ってるらしい。
「え！高田先生は阿部ちゃんと一緒にいたんですか？」
アミちゃんは顔を手で隠しつつ、言った。
「やっぱり付き合ってるんですか？」

あ・ヤだな。

なんとなく私はふと思った。
けれど、担任は慌てて
「いやいやいや！付き合ってないよ。
だって阿部先生は僕より６歳年上だよ？」
と笑った。

うそ。担任より６歳年上なんだ。
へー、そっか。そっか。

鈴木君は「マジかー。見えねえ」と呟いた。

「おじゃまして悪かったな。」
パレードが終わり、前の人がレジャーシートを片付け始めたころ、
担任が言った。
そして
「頑張れよ」
と鈴木君の肩をたたいた。
「痛っ。何をですかー！」
鈴木君は苦そうに笑ってる。

パレードは終わった。
私はアミちゃんの顔を見た。
アミちゃんは楽しくて仕方がない、って感じで鈴木君を見て笑ってる。

私は担任を見た。
担任はこれから阿部先生のところに帰るんだろうな。
それできっと遅くなったことを謝って、
きっとそれを阿部ちゃんは笑って許して、
二人でアトラクションに乗る。

パレードは終わった。

でも、夢の時間はまだ終わりじゃないよね。
終わらせたくない。

私は思い切って、言ってみた。

「えーっと、私も二人のお邪魔かな。」
アミちゃんは「えっ？」って顔したけど、私の顔を見て何かを納得したらしい。
アミちゃんが担任をチラッと見たから、私が小さく頷くと
「そうだねー！」
と言ってくれた。
「うわっ網本！ツメタイ奴だなー！」
「今、ラブラブなんですー。」

私は担任に、
「別の友達に会うまで、一緒にまわってください」
と頼んでみた。
「いいけど。大野、大丈夫か？」
「何がです？」
言いにくそうに担任は声を落として言った。
「友達が彼氏を選んだんだぞ。」

私はちょっと考えて、
「アミちゃんはとってもいい子ですから」
とにっこりと言った。
頑張って！と小声で言ったアミちゃんに手を振って
腑に落ちなさそうな顔の担任の横を私は歩いた。

「いいのか、大野さん。」
鈴木くんがニコニコしてるアミちゃんに訊いた。
「うん！あーいい事した！！」
満足顔のあみちゃんの顔を見て、鈴木くんは女子ってワカンネーと
思った。

夢の中　恋愛編？（後書き）

アミちゃんは苗字からきたあだ名でした。
と言うより名前考えつかなかったからそうしたのですが…

読んでくれてありがとうございました。

恋愛編は？まで続きます。
長くなりましたが、よろしくお願いします。

夢の中　恋愛編？

担任と私は、阿部先生が並んでいるはずのアトラクションの前まできた。
「やっぱり、もういないかなー。」
担任はどうしよう。と辺りを見回してる。

もういいじゃん。阿部先生のことなんて！
なんて私はちょっと思ったりした。
…ん？もしかして私は担任に恋とかしちゃってるんだろうか？？
阿部先生に嫉妬したり（担任はナイって言ってたけど）、無理に一緒にいようとしたり。

私は担任の横顔を覗き見た。
「なあ、どうしようか？」
そう私に訊いた担任と目があって、私は慌てて
「えーっと、どうしましょう？」
と阿部先生を探すフリをした。

三年間、一度もときめいたりしたことなかったのに。
普通に担任の数学の授業とか、寝てたのに。
全然、なんとも思わなかったのに。
むしろ三者面談の時とかウザイって思ってたのに。

なんでだろう。
いつものスーツではなく、ジーパン姿だからか、
それともここが夢の国だから??

なんでか一緒にいるとあったかい。

「しょうがない。阿部先生には帰ってから謝ろう。」
私が担任を見ると
「遊ぶぞー!」
と楽しそうに担任が言った。

それから私達はいくつかのアトラクションにのり、しゃがれ声のアヒルと写真を撮ったりした。

学校の生徒とは何回かすれ違い、その度に
「こいつ、校則違反だから、罰なの。」
と担任は言った。
なんだか言い訳してるみたいで、ちょっと悲しくなったり、した。

シノちゃんやあーちゃんや、他の仲良しの子と会わなかったのは、
もしかしてアミちゃんのおかげなのかもしれないな、と思った。

途中で阿部先生も見かけた。
ダンディーな（年配）先生方に囲まれていたので、私と担任はそっ

としておいた。
「阿部先生は人気者だからなぁ。」
って担任は言ってたけど、阿部先生あんまり楽しそうじゃなかったよ。
たぶん担任はダンディーな（担任より地位の高い）先生と、夢の国で出会いたくなかったんだろうな。

もうすぐ解散時間になる。
担任と私はお土産を見に行った。
解散時間になっても、ほとんどの生徒は再入場するので、お土産屋さんはすいていた。
「じゃ、３０分後にここで」
担任はいそいそと買い物かごを持って、どこかへ行ってしまった。

また私は一人になったわけだ。
最初の一人とは違う一人。
最初はアミちゃんにおいていかれて、
今は担任からおいていかれた一人。

私は家族のと、部活の後輩へのお土産、友達へのお土産を買った。

ふと思った。
担任は彼女のぶんを選んでいるのだろうか。

３０分後に戻ってきた担任は両手いっぱいにお土産を買っていた。
クッキー、おせんべ、バームクーヘン、アメ…
「何買ったんですかー？」
って聞いたら、およそ考えつく全てのお土産お菓子の種類を言った。
「大野は少ないなー。」
「家族と後輩と他校の友達の分です。」
私は片手に持っている袋を見せた。
「自分のは？」
「ないです。」
担任はそうかーと言って袋の一つに手をがさがさと入れた。
「はい。これ。」
と渡されたのは、小さいしゃがれ声のアヒルのストラップだった。
「え。何で？」

小さいアヒルは私の手の中で笑っている。
なんか、一瞬で、ふわって、心があったかくなった。

「だって、俺の所為で、友達とまわれなかったんだろ。お詫びにな。」

でも、担任の言葉で一気に心臓が冷たくなった。

担任は申しわけないと思って、私にストラップを買った？

「そんなことないです。」
私は小さく反論した。

俺の所為だって思って、嫌々私と一緒にいた？

「まあ、網本と鈴木のことは俺、関係ないけど…」

私はストラップを先生に返した。

「私は今日、すごく楽しかったです。お詫びとか、いらないです。」

すっごく悲しくなった。
今日一日、楽しくて、担任の横があったかくて、幸せだと思った時間が
消えてしまった。

「彼女さんにあげてください。」

私はゲートに向かった。
もうすぐ解散時間だ。
夢から覚める時間だ。

「大野！待て。」
担任が私の手を掴んだ。

「お詫びって言うのはなんか違った！」
担任は私の手に無理やりアヒルを握らせた。
「お礼だ！お礼！！今日一日ありがとう。」

私はアヒルの顔を見た。幸せそうに笑ってた。

「それと、俺は今、彼女いないぞ。」

「そうなんですか?!」

「いそうに見えたか。」

担任は笑っていた。

「見えます。かっこいいもん!!」

私も笑ってた。

「おだてても何もないぞー!」

担任と私は一番乗りしたゲートで、夢の名残を感じていた。

「やっぱりさ、最後はみんなでまわろうって事になったんだ。」

アミちゃんとあーちゃんとシノちゃんが私に言った。

彼氏はいいの?友達は?

私は聞いたけど、アミちゃんは

「いいのいいの!最後だもん!!いたい人と一緒にいるの!!」

と言った。

「去年と一緒だね。」

とシノちゃんが言った。

これから閉園時間になるまで、また夢の国に帰ります。

現実に戻ったら、進路のこともちゃんと考えるから、それまでは…。

「なんでノッチ、お土産買ってんのー?」

「もう終わりなのかと思ってたんだもん。」
「アホ！再入場出来るの知らなかったの～？」
「ねえねえ！おそろいのストラップ買おうよ！」

私は今がとても幸せだと思った。
みんな、ありがとう。

夢の中　恋愛編？（後書き）

ハッピーエンドにできて良かった！
ちなみにノッチは大野（主人公）のあだ名です。
先生との恋は完結してませんが、いつか書きたいと思います。
恋をする瞬間を書いてみたかったのですが、上手く書けているでしょうか。

最後まで読んでくれてありがとうございます。

本当にありがとうございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2304o/

卒業遠足の今日

2010年10月12日10時16分発行